Y2-22

仙台県庁前に展開したdERUの診療内容

大阪赤十字病院　国際医療救援部
○弘川(ひろかわ)　摩子(まこ)、次田　順司、清水　亮平、
中出　雅治

【はじめに】大阪赤十字病院は、東日本大震災の発災当日に職員12名と共にdERUを宮城県災害対策本部が設置されていた宮城県庁に派遣し、翌3月12日から3月末まで24時間体制で診療活動を行うと共に沿岸部避難所を中心に巡回診療を行った。今回県庁玄関前に展開したdERUの診療内容について述べる。
【活動内容】当初は県庁が避難所も兼ねていたため、到着した3月12日は診療を開始した18時40分から明け方まで52名が受診した。翌13日が82名、14日70名、15日53名と仙台市のインフラが復旧するにつれて県庁内の避難者数が減少し、受診者も漸減した。疾患としては感冒、頭痛などの日常的な疾患と高血圧に代表される慢性疾患が主で、重傷者はほとんどいなかった。外傷では、がれきの片付け等による切創や擦過傷が散見された。3月下旬にはいると一般受診者はさらに減少すると共に援助側の受診が増加した。dERU展開期間中の合計受診者数は794名、同時に行った巡回診療では457名を診療した。疾患の推移や使用薬剤など詳細を報告する。

Y3-01

ウガンダ北部病院外科支援事業 －一般外科医の育成－

高山赤十字病院　外科[1)]、
名古屋第二赤十字病院　国際医療救援部[2)]、
武蔵野赤十字病院　整形外科[3)]
○白子(しろこ)　隆志(たかし)[1)]、白子　順子[1)]、石川　清[2)]、
伊藤　明子[2)]、佐藤　公治[2)]、山崎　隆志[3)]

日本赤十字社は、2010年4月からウガンダ北部地区パデル県に外科医を継続的に派遣する事業を開始した。本事業を通して海外で活躍できる一般外科医師育成の現状と課題について報告する。演者は約300床のカロンゴ・アンボロソリ医師記念病院に2010年4月から5月、2011年4月から5月の2回勤務した。活動目的は、1）同病院へ不足物品等の補充を行い、手術室の整備、2）外科医を継続的に派遣し、手術を含む外科診療、3）インターンおよびスタッフ教育である。実際の診療内容は、病棟回診、手術、外来患者の診察などで、事業開始から約1年間の外科手術件数は1063件であった。症例は、外傷、急性疾患を中心に整形外科、腹部外科、産婦人科、泌尿器科、耳鼻科、脳外科など多岐にわたった。手術室看護師に対する麻酔法の教育、手術器具滅菌手順の作成、インターンへの教育指導を行った。薬品、診断機器、手術機器などの制約の中、現地で行える最大限の医療を提供した。現地では、医師不足、医療インフラ整備・維持、貧困などの課題がある。一方、日本国内では外科専門医制度の中で外科医の専門医志向が強くなり、広く一般外科の修練を行うことが多くの施設で難しくなっている。一般外科医の育成のためには、現地で要求される広い経験を派遣前、あるいは指導医と共に現地で教育する必要がある。海外でも広く活躍できる外科医育成のために、日本国内でも広く救急診療と外科診療をあわせた継続的な修練を行うべきである。我々は、過去5年間にわたり戦傷外科を念頭においた災害外傷セミナーを名古屋第二赤十字病院で行ってきたのでその内容とともに一般外科医育成の課題について報告する。